



第33号

編集発行／碧南市

哲学たいけん村

無我苑

所在地／碧南市坂口町3-100

〒447-0087：TEL. 0566-41-8522

：FAX. 0566-41-7761

## ある連想

久野 昭

(国際日本文化研究センター名誉教授、  
広島大学名誉教授、哲学たいけん村無我  
苑顧問)

教訓や諷刺を含む簡潔な成句として世に使われてきた成句を「諺(ことわざ)」と言う。その成句を最初に言いだしたのが誰かは、まず判然としない。その諺が文字で書かれた記録を遡って探して、およそ何時頃から世に広まっていたかを知りうるにすぎない。そういう諺のひとつに、「ローマは一日にして成らず」がある。普通の辞書では、何事も努力を重ねてこそ成就されるという意味の、中世ラテン語による諺と説明されている。

この諺を最初に言いだしたのは、セルバンテスだという説がある。たとえば渡辺紳一郎の『西洋古典語典』(東峰出版・一九五六)は、『ドン・キホーテ』に出てくるこの諺をスペイン語で紹介して、「今では、余りにも名高い諺として、その元が忘れられているほどである」と言い、「元が忘れられて」それが「ローマについての名高い諺と思われる」ことを、セルバンテスのために嘆いている。だが、『ドン・キホーテ』の前編は一六〇五年、後編は一六一五年に刊行された。それ以前に書かれた書物に、この諺が出てくれば、この説は成り立たない。

十六世紀のイタリアに、ピエル・アンジェロ・マンツェリという人文主義者がいた。Marcellus Palingenius Stellatusというラテン語名で知られている。一五三四年、啓蒙的な詩篇 *Zodiacus vitae* (直訳すれば『生命の黄道帯』) で、一方ではルター、他方ではローマ教会を攻撃。科学の効用について当時としては過激な見解を述べているのだが、その中にこの諺が書かれていることを、私はルース社から出ている辞典のひとつ (*Dictionnaire des Proverbes, Sentences et Maximes, 1960*) の *Persévérance* (根気) の項目で知った。だが、誤解しないでほしい。私には、渡辺紳一郎の『西洋古典語典』をけなす気は全くない。この類の言葉の出典の調査は、それこそ「根気」の要る、一日にしては成らない仕事だからである。

それよりも、到底一日にしては成らぬ物事が僅か一日にして壊れる不安が、いまこの国に拡がっていることの方が、はるかに大きな問題であろう。

去年三月の大震災後、TVの画面に映し出された福島原子力発電所の壊れた建造物の映像に重ねて、私は先ず広島市の原爆ドームを、それからしばらくしてローマの遺跡コロッセオを心に思い描き、そして「ローマは一日にして成らず」の諺を思い出した。私としては、おそらく自然な連想であったと思う。あの自然の災害があの原発の建造物の破壊、さらには放射能汚染の拡大に連なった事態の裏にはあつたものの方が、はるかに不自然ではないであろうか。あの大地震の際、私たちはしばしば「想定外の災害」という

言葉を目にした。「想定外」を想定すること放棄させた想像力の欠如もまた、この惨状を招いた大きな要因であろう。この欠如態は、けなしていい。想像力にもまた、根気は大いに必要なのである。



# 梅原 猛 名誉村長特別講演会 演題 「震災と文明」

平成二十三年十月三十日に碧南市芸術文化ホールにおいて、哲学者で、哲学たいけん村無我苑名誉村長の梅原猛先生による特別講演会を開催しました。特別講演会の詳細については、以下の要約をご覧ください。



## 東日本大震災をどう考えるか

今回の大震災は天災であり人災であるとともに文明災である。地震や津波は天災であるが、原発事故は天災とはいえない。それはたしかに人災でもあるが、文明災であることは否定できない。世界の先進国は多かれ少なかれ原子力発電をエネルギー供給源にしている。現在、原子力発電が総発電電力量に占める割合は、フランスの約八十パーセントを筆頭に、日本、ドイツで約三十パーセント、アメリカで約二十パーセント、イギリス、ロシアで約十八パーセントである。とすれば、文明そのものが問われていることになるからである。

自然エネルギーの活用が叫ばれているが、それはただ単にエネルギーの問題ではなく、文明の問題でもある。

## 文明と哲学

文明を基礎づけるものは哲学である。私は哲学を一生の仕事とすることを決め、

西田幾多郎に憧れて、京大の哲学科に入った。西田は禅の思想に従って日本の文明を「無」の文明とし、西洋の文明を「有」の文明とした。

私は西洋文明の限界を感じ、日本の思想のなかに将来の文明に必要な思想が潜在しているのではないかと思い、四十歳ころに西洋哲学の研究者から日本文化の研究者に転身した。そして四十年の研究の結果、日本文化の中心思想を「草木国土悉皆成仏」（そうもくこくどしつかいじょうぶつ）という天台本覚思想のなかに見出した。

このような原理は日本文化を説明する原理にとどまらず、人類の原初的な文化である狩猟採集文化の思想といつてよからう。

## デカルト哲学への省察

このような原理から西洋哲学を省察してみよう。

デカルト哲学は「我思う、ゆえに我あり」という思想をもつとも確実に明瞭な第一原理とする。そしてそれに対立する

ものが、数式によって表現される無機的な世界である。その世界をデカルトは「延長」としてとらえる。そして人間の身体もそのような物質であり、まったく機械的な法則によって解明されると考える。これが自然科学の成立である。

そしてデカルトは、このように思惟する自我、すなわち精神が数式によって表現できる自然を認識することによって、自然は人間の従順な召使いになると考えた。それは科学技術の成立である。

このようにしてデカルトは自然科学及び科学技術を基礎づける哲学を創造した。この科学技術文明は急速に発展し、人類特に先進国の人類に多大な恩恵を与えていることは否定し難い。しかしその文明は原爆や原発事故のような禍を生み、環境破壊という危機を人類にもたらしている。科学技術文明とそれを基礎づけたデカルトの思想は批判されねばならない。

## ニーチェ、ハイデッガーの哲学への省察

ニーチェはこのようなデカルトの理性を重んじる合理主義哲学に反対し、超人、永劫回帰、及び力への意志を強調する。このような哲学もやはり人間中心主義の色彩が強い。

ハイデッガーも『存在と時間』において、人間を「ダーザイン（現存在）」として把握し、現存在は日常的に頹落し、噂話のなかに自己を失っているが、死を見つめるとき、自己は全面的に回復する

と語る。それを実存という。実存哲学もまた消極的な人間中心主義といわねばならないが、後にハイデッガーはそのような人間中心主義を否定し、存在そのものの声を聴くという神秘的な哲学を唱える。しかし存在は言葉によってしかとらえられず、言葉は人間のみに存在する。その意味で、後期ハイデッガーの立場も人間中心主義であるといわねばならない。

### 草木国土悉皆成仏の立場

近代西洋哲学はこのように理性的あるいは非理性的な人間中心主義を免れない。しかしこのような哲学によって支配される世界は人類にとって大変よき世界かもしれないが、人類以外の動植物にとつては大変過酷な世界である。

どれほど多くの動植物が、このような人間中心主義の哲学に導かれた科学技術文明によって絶滅したことであろうか。このような人間以外の動植物の絶滅は人間の存続そのものを脅かす。

われわれはそのような自然支配の哲学ではなく、自然との共生を原理とする哲学によらねばならない。「草木国土悉皆成仏」という思想に示される共生の哲学こそ、人類の未永い存続を図る哲学にならなければならないであろう。

### 瞑想回廊企画展示

平成二十三年度に開催された瞑想回廊企画展示をご紹介します。瞑想回廊企画展示は、哲学たいけん村のコンセプトに則り、訪れた人の「視覚」と「感性」に訴えかける美術展として、開村以来毎年開催しています。平成二十三年度は、第三十五、三十六回目の企画展示を開催しました。第三十五回は、写真家山本昌男氏の作品を、第三十六回は、書道家中根海童氏の作品をそれぞれご紹介しました。

#### 「川」見る景色、中洲に立つて 山本昌男写真展



七月五日から九月二十五日にかけて「川」見る景色、中洲に立つて」山本昌男写真展を開催しました。山本氏は、欧米を中心に活躍する愛知

県出身の写真家です。雑誌『Newsweek』（二〇〇九年）で「世界が尊敬する日本人一〇〇人」に選ばれています。

作品は、いずれもゼラチンシルバークリント（銀塩写真・モノクロの写真）で三十六点を展示しました。作品は、風景の一部を切り取ったものや、流れる水の一瞬を収めたものなど様々なものがありました。よくよく目を凝らしてみると意外なものが見えてくるなど、遊び心が加えられている作品ばかり。普段、何気なく見ている景色の中に、何か見落としているものがあるかもしれない。そんな気持ちにさせてもらえる展示会でした。

#### 書とメタファー（隠喩） 中根海童書展



平成二十四年一月七日から三月二十五日にかけて「書とメタファー（隠喩）」中根海童書展を開催しました。中根氏は、碧南市出身の書道家で、国内外で活躍しています。

作品は、文字そのものの「意味」や古人の書から感じとった「精神性」をもとに、中根氏独自の精神を造形表現したものです。三十一点の作品を展示しました。いずれも躍動感にあふれており、中根氏の精神が投影された力作ばかりでした。

### 伊藤証信 梅原猛名誉村長 常設展示の設置

「梅原猛名誉村長特別講演会」の開催に合わせて、平成二十三年十月三十日に瞑想回廊二階の一面に、伊藤証信と梅原猛名誉村長の常設展示を設置しました。

これは、無我苑にゆかりのある伊藤証信と梅原猛名誉村長とを来苑者に紹介する目的で設置されたものです。ここでは年間を通じて二人を紹介していきます。

伊藤証信については、遺品を通じた紹介をしていきます。梅原猛名誉村長については、著作に関連した展示を行っていくつもりです。来苑の際は、是非お立ち寄りください。



梅原猛名誉村長  
スーパー狂言についての展示前にて

にしばた哲学の小径俳句 i n g

平成二十三年度「にしばた哲学の小径俳句 i n g」を六月五日に開催しました。今回は、一般の部では一〇七名、小中学生の部では一六七六名の方にご参加いただきました。この「にしばた哲学の小径俳句 i n g」は、哲学たいけん村無我苑から愛知県唯一の自然湖沼「油ヶ淵」の湖畔にある「花しようぶ園」や、蓮如上人ゆかりの「応仁寺」を巡る「哲学の小径」を散策していただき、自由に五七五を詠んでいただくイベントです。投句いただいた作品の中から審査員の先生方の選考により選ばれました句を掲載します。



● 一般の部

大賞

辻褄を合はせて菖蒲まつりかな

安城市 山本英子

特別賞

蜻蛉の道辿り哲学あやふやに

碧南市 小鍛冶巨代

睡蓮の風を貰ひし茶席かな

安城市 杉浦眞由美

轆轤や哲学の道真直ぐに

碧南市 楠宜田潤市

あぢさゐの思ひ思ひに育ちをり

知立市 米川五山子

花菖蒲透きゆく湖の余り風

西尾市 沢戸 守

田螺鳴く一つ覚えのニイチエ論

碧南市 小笠原掬江

自転車に空気満ぱん麦の秋

碧南市 鈴木照子

猫の子のやんちゃ許して日曜日

岡崎市 中根恵子

● 小中学生の部

大賞

哲学の小径の隅にかたつむり

西端中学校二年 杉浦愛佳

特別賞

だんごむしいつもころころピーだまだ

大浜小学校三年 稲垣一斗

花しようぶ雨がふっても笑ってる

新川小学校五年 森川 茜

はなしようぶせたけならべてこんにちわ

新川中学校一年 岡本尚悟

はなしようぶいっしょうけんめい上をむく

西端小学校四年 小林龍生

はなしようぶ右も左も友だちだ

西端小学校三年 大澤貴良

花しようぶ油ヶ淵で待ってます

棚尾小学校五年 石川英里奈

花しようぶ碧の風にゆられてる

西端小学校五年 伊藤優花

にしばた哲学の小径俳句 i n g  
平成二十三年六月五日(日)  
午前九時〜午後四時

主催 碧南市教育委員会

後援 碧南市、碧南市議会、碧南市観光協会、碧南商工会議所、碧南市商店街連盟、碧南文化協会、西端区

協力 碧南市内小中学校

選者 小笠原和男(俳人、「初蝶」主宰、碧南市在住)

岡島礁雨 (俳人、碧南文化協会 俳句部、碧南市在住)

服部くらら(俳人、「若竹」編集同人)

主催 碧南市教育委員会

後援 碧南市、碧南市議会、碧南市観光協会、碧南商工会議所、碧南市商店街連盟、碧南文化協会、西端区

協力 碧南市内小中学校



### 「秋の夜長のコンサート」 高橋誠アコースティックバンド ジャズコンサート

平成二十三年十月十四日、無我苑研修道場において、「秋の夜長のコンサート」・高橋誠アコースティックバンドジャズコンサート」を開催しました。今回は、「バイオリニスト高橋誠氏の率いる「高橋誠アコースティックバンド」の皆さんに出演していただきました。バイオリン、アコースティックギターによるジャズコンサートです。

屋外での開催を予定していましたが、当日はあいにくの雨天。研修道場内で二部に分かれての演奏となりました。力強くも美しい演奏でした。来場者の方々には、音楽に包まれてうっとりとしたひとときをお楽しみいただけたかと思えます。



### 出演者

高橋 誠（バイオリニスト）

愛知県立芸術大学卒。フラメンコ、タンゴ、ジプシー音楽等に惹かれ在学中からアコースティックバンドを結成。今は、独自の音階を持つ東ヨーロッパの民族的な音楽に惹かれているという。即興音楽も多く取り入れた独創性のある音楽スタイルが注目され、全国各地のフェスティバルやコンサートに出演。

テイト・モンテ（アコースティオニスト）

国立音楽大学卒。五木ひろし、小松亮太などの多数のコンサートに出演。CM音楽なども手掛け幅広い分野で活躍している。フリーインプロバイザー（自由に演奏する即興演奏者）を目指し、クラシツク的なダイナミクスや情熱をベースに置きながらジャジーでポップなパフォーマンスを好む。宗次ホール主催のコンサートに定期的に出演するなど、東海地方を中心に活躍中。

望月雄史（ギタリスト）

名古屋出身。八歳よりクラシック・ギターを父である望月英男に師事。一九九六年から音楽活動を開始。以来様々なジャンルのライブ、コンサート、レコーディングに参加。ガットギターのみを使用し各ジャンルで精力的に活動している。エレクトリック・ベースとしても「うたまる」、「MAZDA DEMIO web CM」等、各種音楽作成現場にて活躍中。

### お知らせ

#### 涛々庵茶会・三曲定期演奏

涛々庵茶会は無我苑の市民茶室涛々庵（とうとうあん）を使用した市民茶会です。毎月席主によつてそれぞれに創意工夫がなされ、華やかな茶会となっております。また、茶会に華を添える箏、三弦、尺八による三曲の定期演奏も研修道場安吾館にて行っています。

平成二十四年度の涛々庵茶会は、十月

#### 平成24年度涛々庵茶会・三曲演奏予定表

月 日	涛々庵茶会		三 曲 演 奏 出 演 団 体
	席 主	流 派	
4月22日	沢田 教子 (宗教)	表千家	山本加代子社中・竹秀会
5月27日	小沢わさ子 (宗和)	松尾流	祥友会・竹秀会
6月24日	磯貝 勝代 (宗代)	裏千家	若草会・竹秀会
7月22日	小笠原英美 (宗文)	久田流	菊香次社中・竹秀会
8月26日	神谷美枝子 (宗美)	表千家	絲音の会・竹秀会
9月23日	小林ミサ子 (宗実)	裏千家	祥友会・竹秀会
11月25日	杉浦紀代子 (紀翠)	煎茶道流 松月流	若草会・竹秀会
12月16日	杉浦 伸子 (宗伸)	裏千家	祥友会・竹秀会
平成25年 1月27日	藤原知香子 (宗知)	裏千家	絲音の会・竹秀会
2月24日	永井いく子 (宗郁)	裏千家	若草会・竹秀会
3月24日	杉浦みどり (宗翠)	裏千家	絲音の会・竹秀会

を除く毎月第四日曜日（十二月のみ第三日曜日）に開催します。料金は一服四百円、時間は各日とも十時から十五時まで（立礼茶席は十六時まで）です。三曲の演奏はお茶会にあわせ随時観覧無料で行っています。どなた様でもお楽しみいただける内容となっております。

また、平成二十四年度は、哲学たいけん村無我苑開村二十周年を記念して十月に大茶会を開催します。是非、お越しください。

## 伊藤証信の遺品

平塚らいてう 掛け軸

## 「柔軟な魂の自由宗教者

伊藤証信先生とあさ子夫人を

永遠に記念する」

証信が「進生」して六年後の昭和四十四年（一九六九）秋、平塚らいてうはこの墨書を贈り、証信とあさ子の偉大な業績を讃えた。「柔軟」「魂」「自由」「宗教者」という文字は、まさに二人の生き様を言い当てたキーワードでもある。

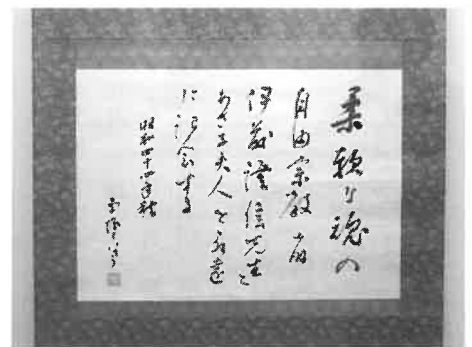
## 「お母さん革命」の先駆者

平塚らいてう

昨年三月十一日に起こった東日本大震災は、津波被害に加え、世界中を震撼させた未曾有の原発事故を招きました。科学文明に身を委ねてきた我々の生き方の根本をも問われる事態になっています。

先日の中日新聞に、原発事故後、放射能から子どもを守りたいとの一心で、果敢に行動する母親たちの姿を「お母さん革命」として紹介していました。

記事によれば、放射能問題で母親たちが立ち上がったのは、今回が初めてではなく、昭和二十九年（一九五四）にビキニ環礁で米国が行った水爆実験に反対し



たのは母親たちであり、「日本母親大会」が、らいてうの呼びかけで始まったことから、らいてうは「お母さん革命」の先駆者であるというのです。

平塚らいてうは、明治十九年（一八八六）東京で生まれ、本名は明（はる）といました。女子を人、婦人、国民として教育するという教育方針に憧れ、日本女子大学に入学しました。明は卒業後、英語学校に通ううちに、漱石門下の双壁と言われた森田草平と恋仲になり、心中未遂事件を起こすなど、スキヤンダラスな女性として社会を賑わせました。

そして、明は明治四十四年（一九一一）、日本初の女性のための文芸誌『青踏』を創刊しました。創刊号には与謝野晶子が詩を寄せ、明は創刊の辞を初めて「らいてう」という筆名で書きました。

青踏社に集まる女性の「五色の酒事件」や「吉原遊興事件」を起こしたり、更にはらいてう自らが年下の青年と従来結婚制度にとらわれず二人の子どもをもうけ

たりしました。そのようなことから、らいてうたちは「新しい女」というレッテルを貼られ、風俗褻乱、社会の安寧秩序を乱すものであると批判されました。

しかし、そのような風潮を物ともせず、らいてうは大正八年（一九一九）に婦人参政権運動と母性の保護を要求し、日本初の婦人運動団体「新婦人協会」を設立しました。また、第二次世界大戦後は、反戦・平和運動も推進しました。

## 証信の妻あさ子との交流

大正十一年（一九二二）、証信の妻あさ子は、『愛聖』を創刊しました。創刊号の寄稿者には、暁鳥敏や河上肇、与謝野晶子、津田清楓らの名だたる人物の中に、らいてうもありました。

その一年後、関東大震災が起こりました。あさ子は、ここにこそ「無我愛」の実践有りとし強く心に決め、らいてうを始めとする女性活動家と「災害救済婦人団」を設立しました。講演会を開いたりして得た受益金を被災者に寄附しました。

らいてうは自伝の中であさ子の名前を出しています。青踏社に向こうを張って旗揚げした真新婦人会の雄弁会の様子を書いた箇所です。

「宮崎光子、木村駒子、西川文子の三夫人が主な弁士ですが、この一人ひとりバラバラで、……のちに知ったことですが、日向きん（む）子さん、伊藤朝（あさ）子さんなどにも、とつぜん話を持ちこんで、賛成を求められたということだす。……」（『元始、女性は太陽であった』）

（下）大月書店四四七頁五行目）しかし、あさ子はそのように社会革命を目標とする女性活動家たちと積極的に行動を共にしていましたが、精神革命を目標とする夫証信と共に無我愛運動を推進していくことを優先していききました。

## 無我愛運動を陰ながら支援

その後も、らいてうは西端無我苑の建設支援をしたり、昭和十二年（一九三七）に証信が呼びかけた「万教協和聯盟」創立の発起人及び賛同者に名を連ねたりしました。

戦後、世界平和への強い思いから証信は世界連邦運動に加盟しました。昭和二十四年（一九四九）に明治村（現碧南市）で、「世界連邦建設同盟中部総局、無我苑支部設立記念講演会」を開催しました。この日、らいてうは熱意をこめた祝辞を寄せました。これを証信が代読したので来会者に大きな感銘を与えたといえます。らいてうは無我愛運動を続けた証信夫妻とは常に不即不離の関係でした。しかし、亡くなった後に贈った、この愛情あふれる墨書からも、終始陰ながらの支援を二人に寄せていたことが分かります。

## 〈参考文献〉

『無我愛運動史概観』、千葉耕堂著、音羽サービセンター、一九七〇  
『元始、女性は太陽であった（下）』、平塚らいてう、大月書店、一九八一